

「ザ・コンサルタント」

主人公が会計士、という映画は初めて観た。さらに自閉症という設定なので、とても珍しいタイプの主人公だ。よく思い付いたものだ。予想外だったのは、アクション（というかバイオレンス）の多さ。農家夫婦宅でのクリス（ベン・アフレック）VS 殺し屋のバトルには度肝を抜かれた。その後間髪を入れずにデйна（アナ・ケンドリック）宅でのバトルになる流れがスゴイ。クリスがデйнаを助け出すため、悪人たちをバツバツと倒すのはカッコ良くてキュンとなった。やっぱり男は強くなきゃね。

ベンちゃんっていい俳優だね、って改めて思った。スルーしていた「バットマン VS スーパーマン」もレンタルしよっかなと思えたよ。（笑）

私は最初からブラクストン（ジョン・バーンサル）の悪人加減に「ムウ？」と思っていた。殺し屋という設定なのに残虐なことをするシーンはなく、どちらかという脅し屋のように見えた。クリスが童謡を歌うのを聴いて顔付きがおかしくなったので、「あっ、やっぱりこいつが弟だ！」と思った。（笑）バーンサルは「フューリー」に出ていた人なんだね。「フューリー」では粗野な人物を演じていたが、今回はまた全然違う演技を見せてくれた。TVシリーズの「デアデビル」や「ウォーキング・デッド」などにも出ているようだし、結構幅広くこなせる俳優さんなのかもね。

メディナ役のシンシア・アダイ＝ロビンソンは、顔立ちがちょっぴりアンジェリーナ・ジョリーに似ている気がした。メディナはキングに弱みを握られ、クリスの調査に没頭することになる。その弱みとは、姉にまやかしのドラッグを売っていた売人に焼きを入れたことにより少年院に入っていた、という情状酌量の余地がある過去。そんな感じで、登場人物皆にドラマチックな過去があるのだ。

<子役について>

幼少期のクリスを演じた小役、ジェイク・プレスリー君は二枚目だった。一言もセリフはなかったが印象深い演技だった。映画初出演とは思えない。

クリス役のスエ・リーとジャスティーン役のイジー・フェネックは演技経験があるようだが、二人とも見事だった。ネットで見付けたイジーの赤いメガネ姿がかわいすぎる。(笑)

クリス父の、息子を優しくしない環境の中で生きて行けるようにする教育は正しかったと思う。それとハンディキャップを持つ少年が、武道を習うのはイイことだと思った。

父がクリスの盾になって死んでしまうシーンで泣いてしまった。後から考えると、ちょっとドラマチック過ぎないか！？って感じだけど。(笑)

ラストでクリスのマネージャーが神経科医の娘さんだったと分かり、「そうだったのか〜」と思いつつ、何だか涙ぐんでしまった。二人で裏社会の金を洗淨していたってワケね。

ギャビン・オコナー監督はなかなか手堅い演出をするのだな、と思った。他の作品も観てみたい。

激しい銃撃シーン多め、死体也多め、でもラストにほっこりできるというのは、何ともビル・ドゥビュークマジックだなあ。彼は「ジャッジ」でも父と息子について描いていた。主人公に兄弟がいるのと、兄弟の中に障害を持つ人物がいるのも共通している。ドゥビュークは自分の父親に強い思い入れがあるのでは？自分の兄弟あるいは近しい関係の人に障害を持っている人がいるのでは？など、色々思いを馳せてしまった。ともあれドゥビュークは注目している脚本家の一人なので、次の作品にも期待している！

というわけで、「ザ・コンサルタント」は全米で一位になったのも納得な快作なのである。まだの方はぜひ観てほしい。

「ドクター・ストレンジ」

宣伝通り、映像がスゴかった。そして魔術師の物語ってコトで、今までのマーベル作品とは明らかに違う感じ。

ストーリー展開が速い。ストレンジの医師時代のシーンも、交通事故のシーンも、超短かった。でもそのおかげで 115 分の映画にできたのだ。

最初は「演技派のベネディクト・カンバーバッチがヒーロー役！？」と思ったが、いやはや彼は何でも演じられるんだね。

ベネちゃんのハダカ、初めて見られた。（笑） 鍛え上げたのでしょうか、イイ体してた。

マッツ・ミケルセン演じるカエシリウスは、凄みのあるなかなかの悪役だった。メイクの力添えもあるのかもしれないが。（笑） ミケルセンは「カジノ・ロワイヤル」以来で見たよ！

エンシェント・ワンが亡くなった時、魔術で時間を戻して生き返らすことはできないの？って思った。

演じたティルダ・スウィントンさんは、透明感のある女優さんだと思った。

エンドロール後のモルドのセリフ、「魔術師が多すぎる」がインパクトあった。続編では彼が悪役になってしまうのかな。

キャラの詳細とか、キャラ間の関係とか、ドーマムウの正体とか、まだまだ不明なことだらけ。きっと三部作になる（？）と思うので、徐々に分かってくるのだろう。

一風変わったヒーロー映画で、なかなか面白かった。

スタン・リーも見られたし！

「スノーデン」

エドワード・スノーデン氏のもろもろを見せ付けられる作品。

大大大好きなジョセフ・ゴードン＝レヴィットが主演だったけど、ジョセフ感は0だった。 スノーデン氏本人が実演しているように感じてしまった。 ジョセフ感がかき消されてしまうほど、アクの強い人なのかも。

「ザ・ウォーク」とか「シン・シティ：復讐の女神」とか、近年のジョセフ作品・演技はとても良かったのに、今回は残念。

ラストでスノーデン氏本人がちょびっと登場するのだが、彼の表情は自分のことを英雄だと思い込んでいるような顔つきだった。 自分がやったことに陶醉している感じの。・・・ロシアから優遇されてるのかもね。私は彼のことを英雄とは感じなかった。 機密をコピーして持ち出すなんて、反逆罪じゃないかな。 アメリカ人は彼のことをどう思っているのだろうか？

ドローン攻撃のシーンには、釈然としないものを感じた。 標的はSIMカードだが、今所持しているかどうかは確認しないで（する気ナシ）ドカーンとやる。 このシーンを見て、世界の終末を感じた。

「フィフス・エステート」の時もそう思ったのだが、コノ手の映画は観ていて気持ちが悪くなるよ。

よく考えてみると、スノーデン事件について知りたかったわけじゃないし、わざわざ映画館で観なくても良かったのかも。

ジョセフの次回作に期待。

「マグニフィセント・セブン」

今までに観たアントワーン・フークア監督作品の中で、一番良かった。

そしてサム役のデンゼル・ワシントンも、今まで観た中で一番かっこ良かった。

サムの「俺たちは皆死ぬだろう」というセリフに不安を抱いたが、7が全滅じゃなくて良かったよ。

クリス・プラット演じるちょっとチャラそうなジョシュが、あそこまで活躍するとは思わなかった。二枚目キャラっぽいので（ウインクしてたし笑）、彼は生き残ると予想してたのだが……。ジョシュの早撃ちはかっこ良かったよ！

ところで近年大作出演が多いクリス。ちょっと前までは脇役俳優だったのに。きっと彼は人柄がよく、地道な仕事ぶりが実を結んだのだろうな。

イーサン・ホーク演じるグッドナイトの、「親父はこう言ってた」→「親父はいろいろ言ってた笑」ってセリフはアドリブ？ そんな感じに見えた。サムとグッドナイトが「南北戦争以来だな」って抱き合ってるシーン、私には「トレーニング デイ以来だな」って喜んでいるように見えた。（笑） 2001年の映画で（監督もフークア）イーサンはその分年を取ったが、デンゼル兄さんはあまり変わってないような。（笑）

ジャック役のヴィンセント・ドノフリオの高音喋りが、まだ耳に残ってる。（笑） ヴィンセントは正に山男って感じ。

イ・ビョンホン演じるビリーもかっこ良かったじゃん！なのにナイフ講習で皆が帰ってしまったのはなぜ？（笑）

ヴァスケス役のマヌエル・ガルシア・ルルフォとレッドハーベスト役のマーティン・センズメアーは、初めて見た。ヴァスケスはジョシュが撃たれた時、「グエロ！」と叫んでガッと加勢するシーンが良かった。レッドハーベストを見て、「あれはコマンチか？俺の目の錯覚か？」って言ったのは誰？ 面白いセリフ。

ヘーリー・ベネット演じるエマは、一度も笑わず・・・。「タマがあるのは私だけだから」ってセリフがクールだった。ボグに止めを刺したのが、7ではなくエマだったのも良い。でも夫は還ってこないで、彼女の気は晴れないだろうな。

冒頭のピーター・サースガード演じるボグの、極悪非道な行いに涙が出た。「俺が目をつけたら土地ではなくなる。塵となるんだ。」ってのは、西部劇ならではのセリフ。ピーターの悪役演技は・・・まあまあだった。(少なくともフライトプランの時よりは良い笑)

そして私はデディ Q 役のルーク・グライムスに、つい目が行ってた。(笑) イケメンじゃない？ デディは撃たれてた気もするが、生き残ってよかった。

ローズ・クリークという、美しい名の町から悪漢が消えて良かった。でも町民がただ助けてもらうのではなく、7を雇ってさらに自分たちも戦うってのがいいよね。

サムの哀しい過去とか、グッドナイトの PTSD の理由とか、デディは何者なのかとか、他にももっと知りたいことだらけだけど、全部描いてたら5時間位の映画になっちゃうもんね。

7の誰もが出て行っても良かったはず。サム以外は自分とは無関係のことだから。彼らが留まった理由は、観客それぞれが考えるべきだと思う。

開拓時代って、きっと激しく熱くドラマチックだったに違いない。だから100年以上たった今でも西部劇が作られるのだ。それに比べて現代はSNS だの何だの、全然ドラマチックじゃない。

「七人の侍」も「荒野の七人」も観たことがなくても楽しめたが、機会があったらどちらも観てみたい。

脚本・音楽・演技・スタント全てが素晴らしく崇高、感動した。正義とは、大義とはを考えさせられる、映画史に残る作品。個人的にも特別な映画になりそうだ。

「ショコラ 君がいて、僕がいる」

フランス初の黒人芸人・ショコラの成功と苦難、友情と愛を描いた感動の伝記映画。

ショコラのような偉大な先駆者の映画が、なぜもっと早く製作されなかったのだろうか？ お手本となる先輩がいない中での成功は、相方フティットの助力も大きかったと思うが、歴史的なこと。 スターとなった人が身を持ち崩し忘れられる、というのはよくあることかもしれないが、結核でひっそり亡くなったというのは可哀想なことだ。 芝居に挑戦しようとする彼に対し、「ショコラは記憶力に問題あり」なんて記事を載せた新聞。 黒人に教育を受ける機会を十分に与えてないくせに、腹が立つ。 ショコラと看護師・マリーさんの愛もドラマチック。 その時代の彼らの関係は、妨げが多かったと思うから。

ショコラ役のオマール・シーは、「最強のふたり」の時以上の熱演だった。 硬軟を巧みに演じ分けられる、素晴らしい俳優だと改めて思った。 ハリウッド映画とフランス映画にバランスよく出演しているのもイネ。

冒頭のフティットは、崖っ縁のように見えた。 ショコラを相方に選んだのは、彼の賭けだったのかも。 フティットのように、ステージを下りると笑わない道化師が多いのかな。 それでも笑いの仕事に従事する男はスゴイと思った。

私はフティット役のジェームズ・ティエレにずっとポーツとしていた。

（笑） 姿も声も喋り方も素敵、目も印象的。 しばらくティエレを追っかけそう。 まずは「太陽と月に背いて」をレンタルしてみようか。 もっと映画に出てほしいな！

スターライフを謳歌するショコラと、成功しても真面目を通すフティットが対照的。 差別に苦しむショコラのシーンは悲しいが、2人の芸に笑ってしまうシーンも多かった。 正に哀歓こももな伝記映画。

フランス映画を観たのは「グレートデイズ！ー夢に挑んだ父と子ー」以来。 いつもハリウッド映画ばかり観ているから、もっとフランスとか非ハリウッド映画に目を向けるようにしたい。

脚本が練り上げられた、素晴らしい作品だった。 音楽・編集・風景映像
もとても良かった。 DVDが出たら欲しいな、と思う位気に入った。
こういう良作は大規模上映されるべきなのにな。

「ニュートン・ナイト 自由の旗をかかげた男」

南北戦争時に黒人奴隷解放のために闘ったもう一人の「奴隷解放の父」、ニュートン・ナイトの伝説を描いた作品。

自分は南北戦争について、これっぽっちも理解してなかったのだと思い知らされた。 10代前半の少年が徴兵されたり、貧民から家畜や農作物をこごとく徴収していたなんて。 戦死者も多い、惨い戦争だったのだな。でも北部と南部の戦いというよりは、黒人を奴隷として扱いたい人間と、そうでない人間の戦いのようにも思えた。 ニュートン・ナイト率いる反乱軍が南部に存在したように、北部にも奴隷制に賛成する人間が結構いたのでは。 戦後も年季奉公なんて条例を作ったり、どうしても黒人を奴隷扱いしたい連中は多かったようだ。

ニュートン・ナイトはリンカーン大統領並みに偉大な人物だと思う。 彼の伝説が、今まで映画化されなかったのはなぜだろう？

マシュー・マコナヘーの、ニュートン・ナイトが乗り移ったのかのような気迫に満ちた演技。 オスカー候補とならなかったのが不思議なくらい。特に南軍の大佐を殺すシーンはすごかった。 髭のおかげ？かニュートン本人そっくりに見えた。

マシューが主役だと、その圧倒的な演技力と存在感により、他の役者は霞んでしまいがち。 でもモーゼス役のマハーシャラ・アリーと、レイチェル役のググ・バサ・ローは健闘していた。 マハーシャラは「ハンガー・ゲーム FINAL」にボックス大佐役で出演していた人なのだな。 ボックス大佐のことは確と覚えているゾ。 ググはかなりの演技派だと思った。あと出番は少なかったが、セリーナ役ケリー・ラッセルも印象に残った。

映画の中では、成長したニュートンの息子さんまでもが、黒人の血を引いているという理由で差別に苦しむ姿が描かれる。 アメリカには今も昔も白人至上主義者がいかに多いのか。

南北戦争から 150 年以上経った現在のアメリカにおいて、黒人は白人と同様に扱われているだろうか。 残念ながら黒人差別の事件のニュースをたびたび目にする。 さらに白人至上主義的な新大統領が誕生してしまい……。 アメリカの現状をニュートンが知ったら、どう感じるだろう。

FREE STATE OF JONES。「ジョーンズ自由州」という原題が印象的。 自由で平等、それが民主主義だと思うのだが。

原案・脚本・製作まで兼ねたゲーリー・ロス監督の意気込みが伝わってきた。

重大な内容の、壮大な歴史ドラマ。

「ムーンライト」

オスカーウィナー作、「MOONLIGHT」。

こんなに痛々しい主人公は、滅多にいない。大好きなケヴィンに思いを伝えられないシャロンに、胸が痛んだ。LGBTの恋愛は、なかなか大変なのかもしれない。原作者の実体験に基づく部分もあるのかと思うと、リアルに感じられる。

アカデミー賞助演男優賞を受賞したフアン役マハーシャラ・アリーの演技は、予想を遥かに超えたものだった。鑑賞してから数日たっても、思い出すと泣けてくる。モデルがいるのなら、その人はきっと大きな存在なんだろうな。

フアンの死に関するシーンがないのが、相当な喪失感だったのだろうと推察でき、哀しい。

ポーラ役のナオミ・ハリスは大熱演だった。すごい迫力の時（フアンに食って掛かるシーンとかシャロンに怒鳴るシーンとか）と、酩酊状態の時の演技分けが見事。ポーラはダメ母だが、青年になったシャロンに謝罪するシーンには泣けた。

しかし助演賞をマハーシャラにはあげて、ナオミにはあげないって、どうなの！？

大人になったケヴィンを演じたアンドレ・ホーランドは、飲食業の経験があるのかなって思う位、コック姿が板に付いていた。

アンドレは「42 世界を変えた男」や「グローリー 明日への行進」などに出演している。私はどちらも観ているのだが、アンドレの記憶がはっきりない。・・・もっと、しっかり観なくては。

本作は、観る人それぞれ違った感想を抱く映画かもしれない。

でもシャロンのようなマイノリティーが主人公の映画は、多くの人に観てもらいたいものだ。

「ライオン / 25 年目のただいま」

映画館で、私の左右の男性が泣きながら観ていた。ストーリーの切なさに加え、俳優たちの真に迫る演技が、観客に感動と涙をもたらしたのだろう。

映画の中で、サルーの生家探しを誰かが手伝っている様子はない。本人にしか分からない、しかもおぼろ気な記憶だから仕方ないのかもしれないが、たった1人で成し遂げたというのはすごいことだ。
だがお兄さんが亡くなっていた、しかもサルーとはぐれたその晩に、というのは哀れ過ぎる。生家探しを力添えしたのは、天国のお兄さんなのかもしれない。

「世の中人で溢れている」し、自分の子供を持つことよりも「不幸な子を引き取ることに意義を感じた」というサルーの養母・スーさんのような女性は、100万人に1人もいないと思う。養子をとる理由は人それぞれだろうが、子供が出来ないからという人と比べると、スーさん夫妻の意志の方が立派に感じる。12歳の時の幻覚を忘れず、茶色い肌の子を養子にした、というのは不思議なエピソードだが。
演じたニコール・キッドマンにも養子がいらっしゃるなと思いながら観ていると、余計に泣けた。

サルー役のデーヴ・パテルは寡作だが、出演作に恵まれているなとつくづく思った。今回はパーマ姿が似合ってたし、サルー御本人の体格に合わせ筋トレしたのかな？いつものなで肩よりがっしりして、かっこ良かった。デーヴ、英国アカデミー賞助演男優賞受賞おめでとう！

幼少期のサルーと、兄を演じた子役の今後にも期待。

奇跡の実話に感涙させてもらった。
近年にない感動作、良い映画だった。

「わたしは、ダニエル・ブレイク」

イギリスには福祉国家のイメージを持っていたが、本作を観たら真逆のように感じた。 心臓病の59歳に求職活動を強いる、困窮するシングルマザーを助けない、そんな国を福祉国家とは言わない。

フィクションであってほしいストーリーだが、残念ながら似たようなケースが頻発しているのだろう。 イギリスに限らず、国からの手当てや給付の申請で納得できない思いをしたことのある人は、 ダニエルやケイティに共感できるはず。

自分も困っているが、目の前の困っている人に優しく手助けする。 容易なことではないが、ダニエルがしたことを皆見習わなくてははいけないのだと思う。

心臓病のダニエルが映画の中で亡くなるというのは、予想はしていたが、やはり泣けた。 病気と国の無責任により、窮地に立たされる姿は見ていて辛かったし、怒りが込み上げた。

ダニエルを演じたデーヴ・ジョーンズが映画初出演だったとは少し驚きだが、ユーモアと温かみのある、心にしみる演技を見せてくれた。

ケイティ役のヘーリー・スクワイアーズも素晴らしかったし、ケイティの娘を演じた子役ブリアナ・シャンにも光るものを感じた。

社会派名匠ケン・ローチ監督と脚本のポール・ラヴァティーのメッセージが、痛切に伝わってきた。 ダニエルが不服申し立てをする時の弁護士が車椅子使用の障害者だということとか、細部にわたってメッセージが詰まっている。

ローチ監督には引退宣言なんてしないで、世の中に喝を入れ続けてほしいものだ。

怒りと哀しみに満ちた映画だが、主人公の振る舞いを通して、人間のあるべき姿を描いた傑作。

これがパルムドール（カンヌ国際映画賞最高賞）だ。

「はじまりへの旅」

～文明社会から離れ、山でサバイバル生活を送る、ベン父と6人の子供たち。入院していた母が死に、彼女の希望通りのお葬式を実現させるため彼らは下山することになったのだが、大騒動の連続となる。～

今までにない映画だった。 驚愕・ヘンテコなキャラとストーリー。
一般人が山でこのような一家を目にしたら、腰を抜かすだろう。（笑）

マット・ロス監督は仏教徒なのかな？ 文明社会に疑問を持っているのかな？ 都会の暮らしにどっぷり、な人にはピンと来ない映画かも。
とはいえ山でのサバイバル生活には限界がある（と思う）。 すったもんだの末、一家が社会生活をスタートさせたラストに、少しほっとした。

ベン役ヴィゴ・モーテンセンの熱演に拍手したい。 淡々と演じていたが、山での撮影はキツかったのでは。

ボウ役ジョージ・マッケーの真っ直ぐな眼差しが印象的。 今後の活躍が期待される若手。 少々トンチンカンぽかったが、芝居・・・だよな？
ベンの義父を演じたフランク・ランジェラは、マフィアのボス（！？）のような威厳だった。

ベン妹の夫を演じたスティーヴ・ザーン。 エンドロールで名前を見て、見覚えがあるような気がしたので検索してみたら「ダラス・バイヤーズクラブ」に出ていた。 パンフレットを持っていたので見てみると、保安官（警官？）役のよう。 フムフム。 ザーンのような脇役俳優のことも、ちゃんと覚えなきゃね。

ベンがバスのバックミラーを見るカットが数回ある。 旅に出発する時、一人ぼっちになってしまったとき、再び子供たちを乗せている時などなど。 見るたびにベンの心情が変化していったという、なかなかいいカットであった。

ベースはコメディーだが、一家のドラマには感動がある。
私的には続編を希望！

「バーニング・オーシャン」

2010年に起きた、油田掘削施設ディープウォーター・ホライゾン爆発事故の、一部始終を描いた作品。

爆発による被害のひどさに衝撃を受けた。 暗闇の中海上の施設が炎上しているさまは、想像しただけで身震いする。

人災だが、工期を優先するのは企業ならよくあることなのでは。 教訓にするべき事故が、事実に近い形で映画化されたのは、意義あることだと思う。 セットも超リアルだったし。

出演者は、スター＆大ベテラン揃いで豪華。

主演のマーク・ワールバーグは「トランスフォーマー：ロストエイジ」のようなエンターテインメント大作も似合うけど、本作や「ローン・サバイバー」等の実話物もヒットさせて、ホント優れた映画人。 マークは再びピーター・バーグ監督と組んだ「パトリオット・デイ」や「トランスフォーマー：最後の騎士王」の公開も控えているので、超楽しみだ。

施設主任ジミー役のカート・ラッセルの迫真の演技。 ガラス片まみれで負傷しているのに、主任の責任を全うする姿に心打たれた。 特に停止ボタンを押すシーンと、作業員の名前を点呼するシーンにグッときた。

相当な環境破壊だったのだろうと思うが、それ以上に11人もの作業員が亡くなったことが気の毒だ。

似たような事故が起きないように、と製作された記録映画だ。

事故に興味を持った方はもちろんだが、ドラマチックなディザスター作品としても味わえる映画だと思う。

「ワイルド・スピード ICE BREAK」

「ワイルド・スピード」シリーズを、映画館で観るのは初めて。大スクリーンに映る桁外れなアクションの数々に、口があんぐり（笑）になってしまった。

ストーリーも壮大かつドラマチック。綿密だが娯楽性のある内容に惹かれる。キャラは相当多いのだが、一人一人にスポットライトを当てているのが良い。「TOKYO DRIFT」から脚本を書いているクリス・モーガンはスゴイ！と思った。

キューバのシーンは、ほのぼの（！？）していてよかった。

ドム（ヴィン・ディーゼル）とストリートレースをしたキューバ人の印象が濃い。レースに負け車をあげようとしたキューバ人に、ドムが「尊敬だけで十分だ」って言うんだけど、セリフが少年漫画っぽい。

立体駐車場から車が落ちてくるのはCG？（笑）車が勝手に走り出すシーンもスゴ過ぎるし。

ドウェーン・ジョンソンの見事な大暴れ！特に刑務所を脱獄するシーンが凄まじかった。

ミスター・ノーバディ・カート・ラッセルは、皆のお父さんって感じだった。

デッカー役ジェーソン・ステーサムがヘレン・ミレンを「ママ」って呼んだ時はニヤニヤしてしまった。（笑）終盤のデッカー&赤ちゃんのコンビが面白かった。ジェーソンはいいパパになるんだろうなって思っちゃった。

流れる曲も全部良かった。サントラ、マジで欲しい。

大満足のアクション映画だった。今回も、“猛烈に”ヒットするんだろな。

「メッセージ」

哲学的で、難解。 原作小説を読んでないので、完全には理解できないストーリーだった。 映画を観てから数日たって、ようやくジワジワ解けてきた感じ。

観客に分かりやすく伝わるように、編集された映画ではなかった。 だから最初はルイーズと娘のシーンは、ルイーズの思い出だと思ってしまった。 でもそうではなくて、未来に起こることだったのだ。 夫とは別れ、最愛の娘は若くして病に倒れる。 それが分かったのに、向かってゆくとは。 母性愛を超えた、生命の神秘と素晴らしさを描いていると思った。 原題 ARRIVAL には出生・新生児という意味もあるし、さらに運命論や時制についてもごっちゃになって・・・やっぱり難しい！（笑）

でも感動作だということには間違いナイ。 映画が始まって、数十秒で泣いてしまったし。

ルイーズ役・エーミー・アダムズはいつも良いが、今回は本当に素晴らしかった。

エーミーと比べると、フォレスト・ホイッテカーとジェレミー・レナーは少々霞んでしまった？（笑）

ヘプタポッドは木のような、タコのような。 エイリアンは人間に転生できるのか？って考えてると、また頭がこんがらかってしまう。

確かに難しいけど、このような物語には滅多に出会えないと思うので、原作も読んで浸ってみたいな。

「ゴールド / 金塊の行方」

渋い金鉱ドラマ。採掘会社&地質学者による金の偽装事件（実話。Bre-X 事件という）を描いた作品。1990年代とはいえ、そんなインチキに業界が騙されたなんて、と首を捻ってしまう。

採掘会社 CEO ケニーをマシュー・マコノヒー、地質学者マイクをエドガー・ラミレスが演じる。

ケニーはマラリアにかかっても生き延びたり、採掘を妨害されても次の作戦を考えたりする、しぶとい男。マシューはそんなケニーをパワフルに演じていた。体重を増やしただろうし、パンツ一丁&全裸のシーンもあって、文字通り身体を張っていた。今年2月に公開された「ニュートン・ナイト」での演技とは（当然だが）全然違うし、さすがハリウッド演技派の頂点に君臨する俳優だな〜と思った。2017年は主演作を2本も観られて良かった！マシュー、大好き！

マイクは本当に自殺したのか？なぜ彼は金を偽装したのか？ナゾの多い事件だ。

エドガーの、冷静な演技が印象に残った。あの帽子、あのヒゲ、エドガーがホントの地質学者に見えた。（笑）

ケニーとマイクは友情で結ばれているように思えたので、ラストの展開にはちょっと切なくなってしまった。

①ロイド役の俳優を「ダークナイト」のリースかなと思いながら観ていた。

②エンドロールでレイチェル・テイラーという名を見て、「トランスフォーマーのマギー？」と思った。

後日ネットでググってみたら、①②とも当たっていた。レイチェルはオバチャンになってしまったな〜。ロイド&リース役の俳優の名はジョシュア・ハート。覚えなきゃ。

他にはコリー・ストールやブルース・グリーンウッドが出ていたヨ。

印象的だったケニーのセリフは、「採掘者とは、信じている者のことだ」。確かに。でも偽装はダメ！

金鉱がテーマの映画は初めて観たし、面白くて引き込まれ2時間があっという間だった。

Bre-X 事件に興味を持った人、マシューのファンの人は必見。

「パトリオット・デイ」

ボストンマラソンテロ事件の凄惨さ、警察と市民の団結、日本のニュースでは伝えられなかったことを知ることができた映画であった。

テロ犯は、本当に卑劣だと思った。 女性二人と8歳の少年の命を奪って
おいて、何が聖戦だ。 アメリカに文句があるなら国へ帰れ、野蛮もいい
かげんにしろ。

「ローン・サバイバー」や「バーニング・オーシャン」そして本作と、壮
絶な実話の映画化に挑み続けるピーター・バーグ監督には本当に敬服する。
こういう作品を作り上げるには、かなりバイタリティーがいると思うし。

主人公トミーは腰痛持ちとか・髪がのび気味とか・奥さんとのエピソード
とか、設定が細かかったので実在の方だと思いながら観ていた。 でも本
人の出演がなかったので、「？」と思いググったところ、実在の人物では
なかったようだ。

トミー役マーク・ワールバーグの出演作はもう何本も観ているし、優れた
俳優だと評価してたけど、本作の大熱演を見て本当にマークが大好きに
なった。（マークの涙初めて見た・・・ホント大熱演） 「トランス
フォーマー：最後の騎士王」も楽しみ。

一番息をのんだのは、やはり住宅街での激しい銃撃戦の場面。 J・K・シ
モンズ演じるビュジリーズ巡査部長が、自ら犯人を仕留めに行く姿にグッ
ときた。 防弾チョッキは着ているんだろうけど、犯人とあんな近くで撃
ち合いに・・・。「死ぬかも」なんて考えてない、正義が悪に向かって
ズンズン向かって行ってる感じ。 巡査部長は実在の方、スゴイスゴ過ぎ
る。

ジョン・グッドマンが、ホントの警視総監に見えた。（笑） あのお馴
染みのどすのきいた声（とあのお腹）が、総監役にピッタリ。
さらに FBI 捜査官役でケヴィン・ベーコンも出演している。 内容はシリ
アスだが、キャスティング的にはとっても豪華な映画なのだよ。

テロ犯タメルラン役のセモ・メリキッセとジョハル役アレックス・ウルフも、なかなかの芝居を見せてくれた。特にセモは熱演だった。ネットで彼の写真を拝見したら、ブルーグリーンの目が素敵なイケメンだったのでちょっとビックリ。カラーコンタクトして出演したのかな？ヘアメイキャップする人ってスゴイな～イケメンをチェチェン人テロ犯に仕上げるとは！セモもアレックスも、次は犯人以外の役を見せてね！

警察とFBIは別々に捜査するイメージがあったけど協力、そして市民も協力したから（警官に金づちあげたり笑）早い犯人逮捕につながったのだろう。警官が市民に「地下室に逃げろ」と言う場面が数回あったが、こんなに地下室というワードが出てくる映画は初めてだ。私もアメリカに移住したら、地下室付きのお家に住む。（笑）

警官役の男性陣皆かっこ良かったけど、“ボートを狙うシーン”に出てきたオバチャン警官も負けずにかっこ良かった。（笑）

中国人のダンさんが、ベンツもろとも拉致されてしまうシーンもハラハラした。よく逃げたものだ、良かった良かった。

でもMITで殺された若い警官が気の毒で……。パトカーは防弾仕様になってないの？一旦逃げてしまえばよかったのに……。本当に気の毒だ。

テロ事件の映画化作品の中でも一級品だと思う。そしてあれだけ凄惨な内容なのに、怒りやショックよりも感動の方が上回る映画だ。レッドソックスがボストンユニフォームを着て、選手が力強いスピーチをするシーンも感動だよね。観終わってすぐ、「もう一回観たい」と思った。心に刻むべき作品、間違いなく上半期一の秀作だ！

「ハクソー・リッジ」

奇跡の衛生兵の実話。

激しい戦闘シーンに肝を潰した。“本当の戦場”かと思った。あまりのショックで、戦闘シーンの間ずっと口を両手でおさえていたほど。戦場では兵士は屍になる。戦争はもうあってはいけないと思う。

デズモンド・ドスさんの、驚愕の生き様。 信仰心が厚いとはいえ、よく銃を持つことを拒否できたものだ。 正に鉄の信念。

「目が見えない！」という兵士の目に水をかけてあげたら目が開いた、というエピソードに感動した。（アンドルー・ガーフィールド演じる）デズモンドさんがハクソー・リッジ（前田高地）を担架で下りる姿はキリストのように見え、涙が出た。キリストのような衛生兵の存在は、兵士にとって心強いだろう。

前半のドス家のドラマにも、注目していただきたい。父トムはアル中・DV父だが、どうやら第一次世界大戦に出征したせいでそうってしまったようだ。母の「お父さんは戦争で性格が変わってしまった」、「戦前のお父さんを見せてあげたい」というセリフに切なくなってしまった。でもデズモンドさんの軍法会議には駆けつけていた父。きっと戦前は、デズモンドさんのように優しい男だったに違いない。戦争は殺し合い、性格も変わってしまう。世界大戦に、一体何の意味や得があったのだろうか？

演技、容姿、アンドルー・ガーフィールドの全てに心奪われた。男女問わず、彼の清々しいイケメンっぷりに魅了されたと思う。本当に、絵になるイケメン。特に、ニコっとした時の優しい笑顔がたまらない。（後半は顔も泥まみれとなり、イケメン台無しになるが笑） アンドルーは声・喋り方も優しいんだよね～。

彼にとって本作での演技は、相当キツかったのでは。戦場で仲間を担いだり引っ張ったりして運ぶシーン、ハクソー・リッジからロープを使って仲間を下ろすシーンでの、苦悶の表情がオーバーとは思えない。演技ではなく、本当の苦しさによる表情のように見えた。（俳優も大変な仕事なのだヨ）

一世一代の芝居をしたのに、オスカーを逃してしまったのは残念。 でもアンドルーはまだ若いので、いくらでもチャンスはある。 今後も大注目＆応援したい俳優だ。

グローヴァー大尉を演じていたのは、サム・ワーシントン。 前半はキツイ表情をしていたが、後半何回か見せてくれた優しい顔付きに、ちょっぴりキュンとなった。（笑）

私が少しびっくりしたのは、“大尉も戦場に行く”ということ。 自分の机を持ってる軍人は行かないイメージだったので。 でも大尉が撃たれたら大変だから、後方にいて指示を出すのかナ。

ヴィンス・ヴォーン演じる鬼軍曹が訓練中兵士に怒鳴り続けるシーンで、ずっと自分が怒鳴られているよ～な気分になったのは、私だけ？（笑）
ヴィンス出演作で私が好きなのは、「インターンシップ」。リストラされたヴィンスとオーウェン・ウィルソンが、大学生に交じって Google 社のインターンシップに参加するコメディー。・・・戦争モノのあとに観ると、和める映画だと思う。（笑）

（アル中・DV 父役だけど）久しぶりにヒューゴー・ウィーヴィングの演技を見られて嬉しかった。 先程も書いたが、やはり軍法会議に駆け付ける姿にグッときたな。

ヒューゴーは私が初めて買った映画 DVD&今でも好きな作品の一つ、「V・フォー・ヴェンデッタ」の主演俳優なのだ。 理念・信念がポイントとなっているところが「ハクソー・リッジ」と通じる。 素晴らしい作品なので、未見の方はぜひ観てみてほしい。

スミティ役ルーク・ブレーシーの演技も印象に残った。 そして私はハリウッド役ルーク・ペグラの肉体に目が行ってしまった。（笑） 随分とイイ体ナ～と思って。 でも！彼のハダカって、どういう理由でこの戦争映画に必要なだったのか？ 女性と一部の男性へのサービス、としか思えない。（笑）

話がちょびつと逸れるが・・・

～私の住まいの近くに、自衛隊の駐屯地がある。 前を通る時、隊員が訓練していたり・ジョギングしたり・自転車で通勤して来たりする姿を見かける。 たまに落下傘！を見かけるコトも。 映画で日本兵もたくさん死んでいくのを見て、隊員さんはそうなってほしくないと思った。 日本人は死に過ぎた。 自衛隊に戦争させないでほしい。 だから日本人が今観るべき映画だと思った。～

ルパート・グレグソン・ウィリアムズによる音楽も、ジェームズ・ホーナーを彷彿とさせる荘厳さだった。

「ハクソー・リッジ」は戦争映画なんだけど、デズモンドさんの言葉と行動には心あらわれた。

メル・ギブソン監督の心意気が伝わってきた。

映画史に残る作品だ。

「ジョン・ウィック：チャプター2」

このシリーズ、本当に好きになってきた。

前作で光っていた独特のユーモアが減ってしまった点は残念だが、その代わりに娯楽作度は上がったと思う。 多勢 VS 無勢（というか、1人？）というのは有りがちなが、やはり観ていて面白い。

前作もすっさまじいアクションだったが、本作でガン・フー、ナイ・フー、カー・フーはパワーアップしていた。 惚れ惚れしてしまうほど。 というか、スゴ過ぎてポカンとしてしまうシーンが多い。（笑） 他のアクション映画にも車で跳ね飛ばすシーンはあるが、本作の方がマジでやっている感があり、「アッ危ない！」とヒヤヒヤしてしまった。 「今のスタントマン大丈夫かな？」と心配しながら観なければならないのはこのシリーズだけだ。（笑）

前作から言われていた“ペンシル殺し”の全貌が判明。 「そんなことできるワケないじゃん」と思っていたのだが・・・この技を持っているのは世界中でジョン1人だけだろう。

“武器ソムリエ”がいるのがスパイ映画っぽい。 でもスパイが散々やってもそんなにR指定されないのに、殺し屋が主人公だとすぐRにする。 ジョン・ウィックシリーズは、私的にはPG12で良いのでは？と思う。 まあいいけど。

キアヌ・リーヴズは、今回もスーパースーパーカッコ良かった！！ 撃ったり撃たれたり、刺したり刺されたり、投げたり投げられたり、そしてダッシュしたりと、若くはないのにスッゲーなあと思った。 でもアクション俳優界も高齢化社会だから（笑）、50代はまだまだ若い方なのかもね！ ジョン役はきっとキアヌーしか演じられない。 彼はベテランだけど、今が脂が乗っているような。 ハマリ役を得た俳優は、輝いて見えるのかもネ。

ジョンは相変わらずプロフェッショナルでストイック。 でも今回は戸惑う姿も見られ、より人間臭く感じられた。

犬がクンクン言ったり、ジョンによく懐いているトコがかわいかった。
まだ子犬なのかな？ 成長して2倍3倍の大きさになったら、ジョンの
良き助っ人となるかも。ジョンが危ない時、敵にガフウ！！って噛みつ
くの。（笑） 弾丸もスイスイよけて。

サンティーノのキャラが強烈だった。何か、すごくズルイ感じ。（まア
悪役だからね） 演じたリッカルド・スカマルチョの顔も濃くて、忘れ
られなさそう。（笑）

イーアン・マクシェーン演じるウィンストンは、ジョンの父親代わりのよ
うに思える。「ジョナサン」と呼び掛ける時が特に。

サンティーノの護衛アレス役のお姉ちゃん、ルビー・ローズもなかなか
かっこ良かった。スーツ姿、キマってた。ルビーは「トリプルX：再
起動」にも出ているようで、アクションが好き・得意なのかな？ 未見
だけど、ワイルド・スピード（笑）も出ているし、今度レンタルしてみ
よっかな。

カシアン役コモンも大健闘だった。ホント拍手を贈りたいくらい！
コモンは最近音楽よりも俳優活動に集中しているのかな？ 「グロー
リー / 明日への行進」とか「ウォンテッド」とか、有名作に出まくってい
るもんね。

オーレリオ役ジョン・レグイザモの出番が少なかった。（前作の半分くら
い） メチャメチャになったムスタングの修理が「クリスマスには直す、
2030年のな」というセリフには笑ってしまった。

ピーター・ストーメアが、最初の方にちょびっと出ていた。・・・いっ
つもいっつもちょっと変わっているよな、あのオジサン。（笑）

コンチネンタル・ローマ代表役のフランク・ネロも貫禄ありあり。ネロ
は「ジャンゴ/繋がれざる者」に出ていたようだが、よく思い出せない。
だっていっぱい男たちが出ているんだもん。でもジャンゴのDVDを買
う予定なので、そしたら注意して観よ。

今回もチャド・スタエルスキー監督のアクション演出は完璧だった。格
闘シーンは“試合”を見ているかのように感じた。スタントマン出身とい
うことで、最高のアクション映画を作るためにはきっと妥協しないのだろ
うな。

そして脚本のデレク・コルスタッドのキャラクター作り力がつくづくすご
いと思った。クエンティン・タランティーノ並み、とまではいかないが
（笑）、キャラ設定がユニークだな〜と。

このシリーズは Music もイイ！　ローマのライブシーンでの曲が印象的。
ライブステージの上で殺し屋が銃を撃ちまくるって、ありえない！という
か、面白かった。（笑）

きっと「3」では、コンチネンタルを退会させられた後のジョンを描くのだ
ろう。　もう今から「3」を待ち焦がれてしまう。

アクション好きなら、絶対楽しめる。

ジョン/キアヌーの勇姿&スーパーアクションの数々は、映画館で味わうべ
き！

「ザ・マミー / 呪われた砂漠の王女」

“ダーク・ユニバースシリーズ”ということで、ダークな・じめじめしたシーンが多かった。 が、笑いも程よく入ったモンスター映画に仕上がっている。 アレックス・カーツマン（トランスフォーマー1・2の脚本家）が監督、クリス・モーガン（ワイルド・スピード3～の脚本家）が製作というのも豪華だ。

平日なのに映画館の座席が半分近く埋まるって、滅多にないこと。 やはりトム・クルーズは人気者なんだな～って思った。 トム様の顔を見ると、元気が出るもんね。

でもモンスター映画に主演するって、珍しい！？ 今回のニック役はちょっぴりコミカルで面白かった。 いつもよりアクションシーンは少なめだったけど、輸送機が墜落するシーンはすごかった。

トム様は「バリー・シール/アメリカをはめた男」の公開も控えているので楽しみだ。

プロディジウムのリーダー、ヘンリー・ジキル博士を演じたのは名優ラッセル・クロウ。 老けたなぁと思ったけど（失礼）、トム様とのファイトシーンはスゴかった。 さすが“グラディエーター”。（笑）

ジキル博士は今後もダーク・ユニバースシリーズに出てきそう&色々やらかしそう。（笑） プロディジウムは悪・モンスターを研究している組織のようだが・・・何か怪しい感じ。

トム様映画に出る女優は、アクションもこなさないといけないので大変。 ジェニー役のアナベル・ウォリスは、水中シーンあり・ミイラをぶん殴るシーンあり・ダッシュシーンありで、奮闘していた。

アマネットがちょっぴりかわいそうだと思ったのは私だけ？ だって王女になる約束を父に破られたら、そりゃ怒るよな～って。

今回のミイラ役といい、「キングスマン」での義足の殺し屋役といい、ソフィア・ブテラはちょっとおっかないキャラを好むのかな！？ ソフィアの熱演のおかげで、アマネットのインパクト大だった。 10月公開の「アトミック・ブロンド」にも出るようだ。 観てみたい、またおっかない役かな。（笑）

ホラー感は控えめなので、苦手な人でも大丈夫。 一味違ったトム様映画、
として楽しめると思う。 そして今後のダーク・ユニバース作品にも要注
目、ですな。

「トランスフォーマー：最後の騎士王」

待ちに待った新作だが、脚本家にいつもの名前が見当たらず一抹の不安を抱いていたのだが、的中してしまったのかな。今までシリーズの脚本を担当してきた脚本家たちは、今回どうして参加しなかったのか。私の推測だが、アレックス・カーツマンは「ザ・マミー/呪われた砂漠の王女」の監督で忙しかった、アーレン・クルーガーは「ゴースト・イン・ザ・シェル」の脚本に参加していて忙しかった、のかなと。だから「アイアンマン」で知られるアート・マーカムとマット・ハロウェイが担当したのかな、と。アメコミ風味のトランスフォーマー新作！？

突っ込み所としては、まずイザベラがストリートキッズだという設定に無理があると思う。なぜなら地球が荒廃している様子はないから。レノックスの立ち位置と、シモンズの役割も微妙だ。2人とも前三部作で重要なキャラだったのだから、中途半端に登場させないでくれヨ、と思った。そして「ロストエイジ」では、ケイドは亡き妻を一途に思っている男だった。それなのに今回は「パパ、デートしなさい。一人で死んでほしくない」と娘から言われるようなキャラになってしまった。

「ロストエイジ」ではガルヴァトロンとなったメガトロンが、また元通りになってるし。そんな感じで「アレ？」となってしまうところが多々あったのだ。

まあ“オプティマスが洗脳され、一時人類の敵となる”というのと、“イギリスを舞台の一つとした”点はイイと思うが。

でも！ちょっとした疑問点も、マイケル・ベイ監督の演出力で吹き飛ばって感じなのかな、ウンウン。私的には次回の脚本は、カーツマンかクルーガーが復帰するのを希望しているけど。ところでカーツマンとクルーガーの写真をネットで見たんだけど・・・脚本家って、大学教授みたいネ。（笑）

今回出番は少なめだったけど、やっぱりオプティマスは宇宙最強の戦士であり、地球の守護神なのだった。

バラバラになったバンブルビーが元通りになるシーンにビックリ。そしてビーが世界大戦の時から地球にいた、ということにもビックリ。スタースクリームの声帯？をビーに移植しようとするシーンがおかしかった。

オートボットたちがスクリーンで躍動するのを見ているだけで、感動したよ。

人型オートボット、コグマンのキャラも面白い。（ちょっとやかましいが。） 料理も作れる執事オートボット、私も欲しいな。

ホット・ロッドの銃は、時間を止められるってのがスゴイ。 もう何でもアリって感じ。（笑） パンプを読んだらオマール・シーがホット・ロッドの声を担当していたようだ。 観る前から知ってたら、よく聞いたんだけどナ。

スクイクスは、「スター・ウォーズ」の小ロボットに似ている！？

でもカワイイし、ラストの方では頑張って活躍してたし。

ミニダイナボットもカワイイ。 そしてホイーリーもちよびっと出ていたような。 グリムロックもまだケイドのそばにいたんだね。

ケイド役マーク・ワールバーグは、今回も壮絶なアクションをこなしていた。 マークは今年「バーニング・オーシャン」「パトリオット・デイ」そして本作と、3本も主演作が公開された超働き者！ 4月から映画館でマークの顔ばかり見ている感じ。（笑）

存在感大だったのは、バートン郷役の、サー・アンソニー・ホプキンス。 こういう色々入り乱れた作品（笑）の中でも、説得力のある芝居ができる俳優はなかなかいないだろう。

バートン郷の飼い犬は、あの話題の犬かな。 コグマンが散歩させてるのがおかしかった。

ジミー役のジェロッド・カーマイケルも、まアハイテンションな演技で。

（笑） ベイ作品って、ハイテンションなキャラ多いよね。（笑）

イザベラ役のイザベラ・モナーは、今後アクションもやり、ドラマもこなせる女優に成長していきそうだ。

スタンリー・トゥッチはてっきり「ロストエイジ」でのジョシュア役で出演するのかと思ったら、魔法使いの役だった。 でもトゥッチは観るたびにカメレオン俳優だナ～って思う。

冒頭でストーリーについてグチグチ書いてしまったが（笑）、自分にとってトランスフォーマーはやはり特別なシリーズなのだった。

トランスフォーマーシリーズが永遠に続きますように。

「ファウンダー ハンバーガー帝国のヒミツ」

天下のマクドナルド社のファウンダー（創業者）たちを描いた作品。

マック&ディック・マクドナルド兄弟こそファウンダーだ、と言いたいところだが“世界のマクドナルド”となる礎を築いたのは、クロックの方かなとも思う。大規模フランチャイズに懐疑心を持つ兄弟だけで経営していたら、“カリフォルニア州のマクドナルド”のままだったかもしれない。マクドナルド好きの私としては、そんなの困る。だからやっぱり3人がファウンダーなのだろうな。

買収しマクドナルド兄弟の本店から看板を取り外しさせるシーンが残酷過ぎて、クロックが悪役のように見えた。あとシェイクを粉シェイクにしようとするのがダメ、とんでもない！それでも元シェイクミキサーのセールスマンかって感じ。（結局ミルク入りに戻ったようだ）

ディックがテニスコートにチョークで厨房の図を描いていくシーンを見て、何だか感動してしまった。ポテトの揚げ方・ハンバーガーの包み方・紙袋に入れるということ・・・それらを考案したのはマクドナルド兄弟なのに、クロックから締め出されるなんて。ゴールデンアーチをデザインしたのもディック氏。ちょっと知らない土地に行った時にゴールデンアーチを見付けると、ホッとするよね。そして何より私が感動したのは、マックとディックの兄弟愛だな。

妻やマクドナルド兄弟、邪魔者は締め出すタイプなクロックも、マイケル・キートンに演じられると憎めない感じ。キートンはベテランだが、近年脂が乗っているように思える。そして（関係ないが笑）キートンが私の母より年上だということにビックリ、50代に見える・・・。

「バードマン」「スポットライト」そして本作と出演作を観てきて、キートンのファンになった気がする。「バードマン」は、突拍子もない演技・作品。「スポットライト」では助演だが、ハレクを食うところは食っていた。でも本作の演技も好き。

ディック役のニック・オファーマンの、ぶりっとした演技も印象に残った。マック役のジョン・キャロル・リンチは「テッド2」にも出演しているとのこと。（コミコン会場の人かしら？笑）確かにキャロル・リンチのふわりとした雰囲気は、コメディーターに向いている。そして私はフレッド・ターナー役のジャスティン・ランデル・ブルックがイケメン！と思った。誠実で優しそうなハンサム。ジャスティンはTV出演が多い俳優のようだが、映画にも出てほしいな。

映画が始まってすぐに「音楽が良いな」と思ったら、カーター・バーウェルが担当していた。「キャロル」とかもいい音楽だったもんね。

今までマクドナルドは気軽に利用していたが、これからはマクドナルド兄弟のこだわりに思いを馳せながら食事したい、と思った。

とても良い映画だった。
マクドナルド好きは必見。

「ワンダーウーマン」

あっぱれ、ガル・ガドット。 当分はガルがハリウッド女優のトップに君臨するだろう。 彼女はゴージャスだが（2人お子さんがいらっしゃるせい）他の同世代女優のようなチャラさがなく、地に足が付いている感じで好感が持てる。

ちょっぴり天然だが、プリンセスらしく気高い・毅然としているダイアナのキャラクターも好き。

ティアラと、銃弾をはねかえすブレスレットがいい。

盾はキャプテン・アメリカのと似ているが、2人が戦ったらワンダーウーマンが勝つだろうな。（笑） どの衣装も素敵だったが、ロンドンでのメガネ・帽子姿の秘書ルックが特に似合ってた。 バンダイから発売されるワンダーウーマンフィギュア、欲しいナ！

今までは「スター・トレックの・・・」というイメージしかなかった、スティーブ役のクリス・パイン。 だが！今回は魅力的だった。 ダイアナに戸惑いながらも、誠意を持って接する姿が印象的。 クリスは今作で株を上げた！ スティーブフィギュアは発売されないのかしら？（笑）

アンティオペ役のロビン・ライトの勇姿、もっと観たかった～と思ったのは私だけじゃないはず。

男性陣は霞みがちだったが、サミーア役のサイード・タグマウイの演技は味があった。 スティーブとサミーアが、ドイツの舞踏会に潜入しようとするシーンがおかしかった。

ルパート・グREGGソン・ウィリアムズの音楽も耳に残った。（ハクソー・リッジの音楽も素晴らしかったし。天才）

ストーリーが壮大かつ感動的。 もう一回観たいと思ったくらい、気に入った。 パティー・ジェンキンス監督に、拍手を贈りたい。

続編が本当に楽しみ。 その前に、スルーしていた「バットマン vs スーパーマン」をレンタルしよっかな。（笑）

「ボブという名の猫 幸せのハイタッチ」

猫は気ままだが愛らしく、癒しでもある。

ボブが喉をゴロゴロ鳴らしているのがかわいかった。 ハイタッチするのもスゴイが、演技をしたというのはもっとスゴイ！ 本当に猫なのかな（！？）と思ってしまうほどだ。

ジェームズがボブと巡り会い、薬物中毒を克服してゆく姿に感動。 克服後、川を見ながらくつろぐ2人のカットが印象的。 ラストの、ジェームズと聴衆と一緒に歌うシーンも良かった。

ジェームズさん御本人はデリケートだが、根はポジティブでたくましい方なのでは。 “冷たい父親の家を何度も訪問しに行ったり”、“どん底状態なのに、傷ついた猫（ボブ）を世話する”シーンを見てそう感じた。 更生はジェームズさんに元々あった（が、弱まってしまっていた）力をボブが呼び覚ましてくれたからうまくいったのだろう。 ジェームズさん御本人の歌声も聴いてみたい。 それと原作の自伝本も読んでみたい！

ジェームズ役ルーク・トレグダウェーの大好演のおかげか、まるでドキュメンタリーを観ているかのようだった。 ジェームズさんの声色をマスターしているのがスゴイ。 ルークは歌もうまく、心に染みた。 これからも良い作品に出てほしいな。

ジェームズとボブの面倒を何かと見ていたベティさん。 彼女は明るいように見えるが、実はお兄さんのことで、心に深い傷を負っている。 それでもLive（生きる）とタトゥーしている、強い方だ。 その後、ジェームズとの仲はどうなったのだろう？

ベティを演じたルタ・ゲドミンタスの笑顔も、とびきり良かったナ。

ビッグイシューが出てきた！ 私も買っていた時期があったのだが、県内の販売員さんがいなくなり、買えなくなってしまっていたのだ。

ちょっぴり懐かしい、また読みたくなった。 私のお便りも、4回載ったことがあるんだ！ ビッグイシューを買えば、ホームレスの販売員さんの収入になる。 ビッグイシュージャパンを検索して、ぜひ購入していただきたい。 販売員さんが猫を連れていなくても、買うべきなのだ！

ジェームズの知り合いの、バズという名の青年が登場する。バズは薬物の過剰摂取で命を落としてしまう。彼もホームレスだったようだが、「二十歳の青年の親は？ 実家は？」と考えてしまった。そして「やはり親の離婚は子供の心を壊すのだな」と思った。家庭に問題のある子は、メンタルを崩しやすいのでは。成人しても。だから社会がサポートするべきなんだな。

猫目線のカメラアングルが良かった。猫は背がちっちゃいから、たまには高いトコに乗りたいよね。でもジェームズさんは肩凝らないのかな？ ボブは5・6 kg 位ありそうだけど・・・。（笑）

編集も良く分かりやすい作りなので、洋画慣れしていない人でも観やすいと思う。猫パワー溢れるポジティブな感動作で、私も元気付けられた。DVD を買って、繰り返し観たい名作だ！

「ダンケルク」

英国紳士は海も空も似合う。

戦争映画だが、英国のいい男が勢揃いのお得な作品だ。

撤退作戦を（脚色を加えつつ）、これだけ感動的に映画化できる監督は、そういない。 クリストファー・ノーランはやっぱり才人、格が違うと改めて思った。

俳優やエキストラ・スタッフの方々の身を案じてしまうような、爆発・爆撃シーンの数々。 マイケル・ベイ映画か！？ってくらいの。（笑）
ノーランも爆発好きなんだネ。

本作で映画デビューした、主人公トミー役のフィオン・ホワイトヘッド。フィオンは控えめな外見だけど、光るものを感じる。演技派になる予感。ミスター・ドーソンの息子、ピーター役のトム・グリーン・カーニーはとっても美形。 彼も映画初出演とは思えないくらいの、しっかりした演技を見せてくれた。

ONE DIRECTION のハリー・スタイルズも兵士役を好演。 しかしハリー、俳優デビューがノーランの「ダンケルク」って、スゴ過ぎ。音楽も俳優活動も応援してるよ、オバサン 1D の CD 全部持ってるから！（笑）

パイロットのコリンズを演じたジャック・ローデンは、私のタイプ。 彼の顔がアップになった時、「あ、ジョッシュ・ハッチャーソンにちょっと似てる・・・」と思った。 「ハンガー・ゲーム」を観たくなっちゃったよ。（笑） 私はジョッシュが大好きなんだ。 ジョッシュは置いて・・・ジャックのパイロット姿はとってもかっこ良かった。 今後、ハリウッドで活躍してほしいな。

ジョージ役バリー・コーガンも、なかなかの演技派。

ギブソン役のアナイリン・バーナードは、目力のある俳優だと思った。

無口な設定だったから、目力が必要だったのかも。

実はフランス兵だったギブソンを追いやりようとしていた英兵が、最後には一緒に逃げようと声をかけるシーンが良かった。

フィオン、トム、ハリー、ジャック、バリー、アナイリン。 若くてイケメン、そして有望な 6 人を皆で応援しましょう。

ケネス・ブラナー演じる中佐が「フランス兵がまだいるから」と棧橋に留まる姿にグッときた。ブラナーは海がバックのカットが決まっていたなあ。

キリアン・マーフィーは謎の英国兵という、あまり良いところのない役柄だったが、ベテランならではの芝居を見せてくれた。彼は目が印象的な俳優なのだが、今回は前髪で隠れてしまっていたので、キリアン感(?)が少なめだった。キリアンは善人か悪人か、よく分からない人物を演じることが多いような気がする。

遊覧船で英国兵を救出に行き、アクシデントがあっても成し遂げようとするドーソンの気概に感動。

ドーソン役マーク・ライランスの演技は素晴らしかった。アカデミー賞助演男優賞にノミネートされるのでは? でも「ブリッジ・オブ・スパイ」でとっちゃったからナー。「ブリッジ・オブ・スパイ」「BFG」そして本作の演技を見て、ライランスのファンになったよ。

<トム・ハーディーに17行>

「ダンケルク」はトム目当てに観に行った、と言っても過言ではない。トムはこれまでも様々な役を演じてきたが、パイロット役を見られるとは! マスク越しの声、操縦桿を握る手、トムの全てが目・耳に焼き付いてる。最初は出番は少ないのかな? と思っていたが、結構出たのでうれしい。

スクリーンにトムが映ると、私の目はハートになっていた。

トムの出演シーンだけのDVD、「ダンケルク トム・ハーディーのみ」が欲しい。(笑) トムが演じたファリアーは・・・ラストでドイツ兵に捕まってしまったの? 何でそんな設定にするんだ、ノーラン!

トムも英国に帰してあげればいいじゃない。

私がトムを好きになったのは「マッドマックス/怒りのデス・ロード」。それ以前からも「欲望のバージニア」や「ダークナイト/ライジング」等を見て、様々な役を演じられる俳優だと評価してたけど、マックス役は本当にかっこ良かった。「レヴェナント/蘇りし者」では悪役だけどかっこ良い、「レジェンド/狂気の美学」ではマフィアだけどかっこ良い。

トムのどっしりしているところ、おっかなそうだけど温かみのある目、実は優しいようなところが好き。トム、だーい好き!!

ところでタイトルの「ダンケルク」だが、私的には俳優陣が“ダンカーク”と発音しているように聞こえた。 DUNKIRK だもんね・・・？

ダンケルク港に駆け付けた民間船の中には、オランダなどイギリス以外の国の船もいた、ということに感動。

ドイツ兵の姿は1回も出てこないのだが、飛んでくる爆弾・弾丸に恐怖を抱いた。 世界大戦時、ドイツは相当な脅威だったのだろうか、と思った。ドイツ・・・とりあえず私的には、本作にダニエル・ブリュールが出てなくてヨカッタ、ヨカッタよ。（笑） だって普通にナチスの役が多いから・・・。

アカデミー賞作品賞・監督賞・撮影賞・編集賞には、軽くノミネートされるだろう。

史実を再現しながら、不屈の精神と仲間同士の連帯の素晴らしさを描いた大作だ。

「猿の惑星：聖戦記グレート・ウォー」

「創世記」「新世紀」では人間キャラにスポットライトを当てていたが、本作はシーザー中心に物語が進行する。ストーリーの質はちょっぴり下がってしまった？　もうちょい捻りを利かせてほしかった気もする。人間側に付いていたドンキーがラストでシーザーを守るため犠牲となるのは確かに感動的なのだが、通には容易に予測可能な展開。分かりづらいというか、小首をかしげてしまうようなシーン・設定・セリフも多々あった。ノバはエイブが死んだ時涙を流していたが、なぜ自分の父親が死んだ時は泣かなかったのか？　“人間動物園”の説明も今一分かりづらい。完結編なので、もうちょい練ってほしかったなと。私的には「創世記」の脚本が一番良かったと思う。

シーザー役のアンディー・サーキスは職人って感じ。貴重な俳優だと思う。特殊視覚効果技術もスゴイが、下敷きとなっているのはサーキスの素晴らしい演技なのだ。

「創世記」はジェームズ・フランコー、「新世紀」はジェーソン・クラーク&ゲリー・オールドマンが人間キャラで出演していた。“スター俳優”というよりは“曲者俳優”と呼びたい方々が。（笑）（褒めてるの！）だから今回は誰が出るのかな～と思っていたら、「ハンガー・ゲーム」シリーズで知られるウッディー・ハレルソン！　思ったより出演シーンが少なく、ちょっと残念。もっとたっぷり出てほしかった。最初の登場シーンが超強烈だった、あと頭を剃るシーンも。私的にハレルソンはやはり「ハンガー・ゲーム」シリーズのヘイミッチ役のイメージが強い。で、シーザーに「感情的すぎる！」とキレた時が、一番ヘイミッチぽかった。（笑）ハレルソンはいつもひょうひょうとしていて、凄みもあって、でも人間味もある良い俳優。もっと他の出演作も観てみたいと思った。

バッド・エイブを演じたのは、「はじまりへの旅」「ダラス・バイヤーズクラブ」（名作）で知られるスティーブ・ザーン。映っているのは猿だが、演技をしているザーンの様子が目に浮かんでくるような感じがした。

猿より人間の方が野蛮で無慈悲。そのままではいけない、と警告している映画なのかな。利他心を持ち勇敢に行動すれば希望が見えてくる、というメッセージも含まれているような気もした。

でもストーリーが暗い、暗すぎる。 シーザーも死んでしまうし・・・。
あまりにも暗いので、私的には繰り返し観たいシリーズではないな。
まあ三部作全て映画館で観られたのは良かったと思うが・・・。

シリーズ通して笑いもなく内容も難しいので、万人向けではないかもしれない。 30 代以上の、ある程度の洋画通向けなのかな。 だが少しでも興味を持ったら、観ていただいて損はないシリーズだと思う。

「アトミック・ブロンド」

「ジョン・ウィック」シリーズと同じ匂いがする。「ジョン・ウィック」の共同監督、デーヴィッド・リーチ作品だから、当然といえば当然。加えて音楽も両方タイラー・ベーツだし！ 異なっているのは主人公が女性だということ、犬が出てこないこと。（笑） それと主人公の職業も異なるのだが、あれやこれや似ている要素が多い。脚本は違う方なんだけどね。

アクションも「ジョン・ウィック」シリーズ並み！ “ドイツに着いたばかりのロレーン（シャーリーズ・セロン）対 KGB 諜報員の車内バトル”に度肝を抜かれた。 やった後のロレーンのセリフ「出だしは好調ね」が good。

ポリスとのロープを使った乱闘もすごかった。そして終盤の階段でのバトルは、もう映画史に残るほどのもの。敵もしぶとくて、本当にすごい闘いだった。シャーリーズ姐さん&スタントマンに拍手！
あと冒頭のガスコイン役のサム・ハーグレイブのスタントに驚愕してしまった。「CG?」って。（笑） 車にひかれる、というシーンなんだけど、本当にやってるように見えた。怪我をしないようにスタントする、というのはもはや芸術といえる。今まで以上に「スタントマンってかっこいい！」と思うようになった。

一番ハラハラしたのは、“ロレーンがスパイグラス（エディー・マーサン）を護衛しながらデモ行進に紛れ込む”シーン。リアルで、映画じゃないように感じた。

ロレーンとパーシヴァル（ジェームズ・マカヴォイ）は仲間のはずなのに、メラメラー触即発ムードだから、2人が一緒にいるシーンもハラハラした。そんな喧騒の中でも美しかったのは、ロレーンとデルフィーヌ（ソフィア・ブテラ）のロマンチックなシーン。ロレーンをバイセクシャルという設定にしたのはいいと思う。男前度も上がるしね。骨太の作品だが、主人公が女性なので、艶やかさもあるのだ。

シャーリーズ姐さんは、「マッドマックス 怒りのデス・ロード」のフュリオサ役がカッコ良かったが、今回のロレーン役も同じ位カッコ良かった。本格的なアクションをこなせる女優は多くない。姐さんにはぜひともタフな役を極めてほしい。

ロレーンの喋り方が独特で、耳に残った。ロレーンは興味深いキャラクター。なぜスパイになったのか？家族は？色々と気になる。彼女は笑わない人だが、ラストの飛行機内でカーツフェルドに「アメリカに帰りましょう」といった時が一番笑顔だった。

ジェームズ・マカヴォイがパーシヴァルのような役にキャスティングされるとは。プロフェッサー X のイメージから離れたいのかな！？なんて思ってしまった。でも意外にハマってた、良い役者だなア。

地味ながら、重要人物スパイグラスを巧みに演じていたエディー・マーサン。マーサンのことは今回初めて見たと思っていたのだが、調べてみたら「V フォー・ヴェンデッタ」や「ミッション：インポッシブル3」に出ていた。両方 DVD 持ってるんだけど・・・（苦笑）もっと勉強しなきゃ。

カーツフェルド役ジョン・グッドマンとグレイ役トビー・ジョーンズは、いつもの感じだった。（！？笑）
デルフィーヌ役ソフィア・ブテラを見られて嬉しい。「キングスマン」や「ザ・マミー/呪われた砂漠の王女」とはまた違った演技を見せてくれた。そして私はメルケル役ビル・スカーシュゴードに目が行ってしまった。イケメン！！ステラン・スカーシュゴードの息子さんのネ。
出番は少ないんだけど、時計屋役 Til Schweiger も印象に残った。（あのイングロリアス・バスターズに出ているそう）
“C”と呼ばれるキャラクターも登場していた。“M”じゃないのね。（笑）

結局 MI6 の二重スパイ・サッチェルは誰だったのだろうか？パーシヴァルが KGB と接触してたのは確かだが。でもラストでロレーンはサッチェルと呼ばれていた。彼女は実は CIA っぽいし、じゃあ三重ってこと？冒頭ガスコインが「サッチェルが売ったな」と言っていた。ガスコインとロレーンは恋仲だったはずでは？謎だ。

パーシヴァルがロレーンに消されてしまった時は、ちょっとかわいそうになった。確かにいかげわしい男だが、優秀なスパイだったのに。

「アッ、プロフェッサーが・・・」って思ったよ。（笑）

個人的には、「自分好みの作品だろう」と思って観に行って、その通りだったので満足満足。

R 指定だがクオリティーが高く娯楽性もあるので、日本でもヒットしてほしい。そして「ジョン・ウィック」のように、シリーズ化されると嬉しいナ。

「バリー・シール / アメリカをはめた男」

トム・クルーズに演じられると何となく悪人に見えないのだが、バリー・シールのやったことは歴とした犯罪。TWA にずっと勤めてりゃよかったのにねえ。でも CIA に誘われる前から密輸で小遣い稼ぎしてたのだから、やっぱり悪い心を持った人だったのだろう。ただ、バリーを利用できるだけ利用して、状況がいよいよヤバくなったらポイ捨てする CIA は狡い。パイロット役なので、トム様の飛行シーンを心ゆくまで堪能できる。軽々と思いのままに飛行機を操縦しちゃうのって、やっぱりすごい。並の俳優には真似できまい。(笑) 特に飛行機からブツを落とすシーンがハラハラした。

ダグ・ライマン監督作を観るのは3作目。作品にドラマチックさがもうちょいあると、好きな監督の一人になるのにな。(笑)

JB 役ケーレブ・ランドリー・ジョーンズは「X-MEN : ファースト・ジェネレーション」以来で見た! 「ゲット・アウト」にも出ているようだし、成長株って感じ。

ジェシー・プレモンズは「ブラック・スキャンダル」以来で見た。一度見たら忘れられない顔の俳優。ちょい役・脇役なんだけど、いつも印象が強い。

シェイファー役ドナル・グリーソンはスリムでいっつもカッコいいなーと思った。

ホルヘ・オチョアとパブロ・エスコバルを演じた俳優が“本物”ぽかった。(笑) 衣装とかヘアメーキャップのおかげなんだろうけど、凄みあり過ぎ。

バリーが DEA・ATF・警察・FBI から取り囲まれるシーンが、ちょっと面白かった。だって普通は1つ来るだけだし、豪華だなと思って。

ーパイロットだったのに、CIA や麻薬王、ホワイトハウスまではめたなんて、すごい人がいたものだ。

期待以上の犯罪モノだった。

今年はトム様主演作を2本観られて良かった。

「ゲット・アウト」

ホラー映画は苦手意識があり、ほとんど観たことがなかった。 チーズで中身がない、とも思っていた。 だが！「ゲット・アウト」はなかなか面白いホラー作品であった！ ストーリーを読んで興味がわいたのだが、観て良かった。

幽霊や化け物が出てくるタイプのホラーではない。 黒人青年が白人の恋人家族の餌食にされそうになる、という内容だから。 人種問題について少なからず織り込まれているように感じるが、そこは監督・脚本のジョーダン・ピールに聞いてみないとね。（笑）

クリスが助かって、何より。 こんなに主人公が助かるように祈りながら観た映画は久しぶりだ。（笑） 「黒人の恋人を持つのは初めて」と言っていたローズと、黒人たちのツーショット写真が何枚も出てくるシーンに戦慄が走った。 ローズが車の鍵を必死に探しているふりをした後、無表情で鍵を出した時も恐ろしかった。 ビンゴ大会の商品がクリスだなんて、もうジョークなのかシリアスなのか、分からない。 ウォルターがおじいちゃん、ジョージナがおばあちゃんっていう展開に、ビックリ。これがホラーなのね。（笑）

クリスがローズ父を襲う時に鹿のはく製を使った。 こういうのありなんだね。 アクション映画では鹿のはく製で襲う、なんてまずナイけど。（笑）

クリスの親友ロッドが、後半あんなに活躍するとは！ 「状況からして、任務完了だな」というセリフで終わりにしていいの！？って思ったけど、まあいいのかも。（笑）

（人によって解釈は異なると思うが）タイトルの「ゲット・アウト」とは、白人に体を乗っ取られた黒人の叫び。 カメラのフラッシュに反応する、というのが妙だが。（笑）

クリス役のダニエル・カルーヤは丁寧な演技だった。 彼の演技力のおかげでB級になり過ぎず、サスペンスのようにハラハラできたのかも。 ローズ父役ブラッドリー・ウィットフォードの怪演を見ていて、「こういう白人男性っていそくだよな」と思ってしまった。 嬉々とした演技で、見ている方もニヤニヤしてしまった。

ジェレミー役ケーレブ・ランドリー・ジョーンズは「バリー・シール」でも本作でも“周囲を引っ掻き回す”役。確かに彼の雰囲気合っているのかもしれないが、もう少し違ったタイプの役柄も見てみたいナ。ロッド役のリル・レル・ハウリーは初めて見るのに、そうじゃないように感じたのはなぜだろう？（笑）　また彼の演技を見たいな。

オープニングとエンディングでかかった曲が耳に残る。不穏な感じの。しばらく忘れられなさそう。（笑）

ホラーを、食わず嫌いしてたのかもしれない。
ホラーと呼ばれる作品の中にも、面白い作品があるのだと思った。
この勢いで「IT / イット“それ”が見えたら、終わり。」にも挑戦してみようという気になったよ。

「IT / イット“それ”が見えたら、終わり。」

ペニーワイズは、デリーに住み着く疫病神って感じなのかな？ 人殺しだが、人間ではないから逮捕もできない。

ペニーワイズの口が怖い。（泣） イソギンチャク（！？）みたい。ビル・スカーシュゴード演じるペニーワイズを見ていて、ヒース・レックジャーが演じたジョーカーを思い浮かべてしまったのは私だけ？ 喋り方とか笑い方とか……。ビルは撮影時、ヘアメーキャップに相当時間がかかっただろうな。イケメンがピエロメーキャップに隠されてしまったのが、ちょっと残念。

子供たちの友情や恋も描かれ、青春モノっぽくもある。ファンタジーのような感じもするし、一方で家庭問題を描いていたり、単にホラーと決め付けられない作品だ。

かわいい弟ジョージを、ペニーワイズに奪われてしまったビルが気の毒。いじめられっ子だったビルが、後半どんどんたくましくリーダーシップを発揮するようになってゆく姿が良かった。演じたジェーデン・リーバーハーは、さすが主演に抜擢されただけあって、演技が上手い。

ムードメーカー・リッチー（フィン・ウォルフハード）のキャラが面白く、何回もセリフに笑ってしまった。井戸の家の前で見張り役やりたい人って問いに、ほとんど皆が手を挙げたシーン、私も笑ったし他の観客も笑っていた。

エディ役のジャック・ディラン・グレーザー君は、とても賢そうな顔してる。エディの母親は何か気持ち悪いし、エディの喘息の薬がプラシーボだったっていうのも何気にコワ。

スタン（ワイアット・オレフ）が怖がっていた“絵画の女性”も怖かった。夜中に思い出したくない絵だ。（笑） スタンがペニーワイズに食われなくて良かったヨ。

オバサンはベバリー（ソフィア・リリス）と合うのは、ビルよりベン（ジェレミー・レイ・テラー）だと思うんだけどな。詩を贈ってくれる男性、素敵だよ。第2章でもこの3人の三角関係は続くのか！？

出演者の検索をしていたら、不良ヘンリーを演じていたのが「はじまりへの旅」のレリアン役、ニコラス・ハミルトンだったと分かりビックリした。「はじまりへの旅」の時は12歳という設定の役で、確かにそのくらいの年齢に見えたが、今作では少なくとも16歳くらいに見えたから。ニコラスは顔付きがキツめだから、やはり反抗的な少年の役が多くなってしまうのかな？ でもどんどん、色々な役柄に挑戦して行ってほしいナ。

プロジェクターのシーンも怖かった。子供たちが地図を映して話し合ってたらなぜか恐ろしい映像に変わっていき、さらにはペニーワイズが飛び出してくる、というシーン。予告で見ていたのに、超ゾッとしてしまった、大人なのに。（笑）

ジョージがビルに「お兄ちゃんも一緒にプカプカ浮かぼう」と連呼するシーンにもゾーッ。これも予告で見てたのになア。（笑）

スティーヴン・キング＝ホラーの帝王というイメージだったが、青春モノも取り入れた娯楽作を書く作家、というイメージに変わってきた。彼の作品は子供が主人公、というのが多いのかな？ キング原作の映画は「グリーンマイル」「キャリー」（クロエ版）「スタンド・バイ・ミー」そして本作と、4本しか観たことがないので、他のもレンタルして観ていきたい。2018年1月公開の「ダーク・タワー」は、私の大好きなマシュー・マコナヒーが出演しているので超楽しみ！

全米でホラー映画史上ナンバーワンヒット、となったのも大納得。
第2章の公開が待ち遠しい。

< 追記 >

「ゲット・アウト」「IT」立て続けに2本観て、ホラー映画に対する考え方が大分変わった。確かに怖いのだが、どこか笑ってしまうところもあるし、恐怖だけでなく様々な要素も盛り込んであったり。ホラーは面白い、ホラーは興味深い。質の良いホラー映画なら、ジャンジャン観ていきたい！と思ったヨ。

「ユダヤ人を救った動物園 アントニーナが愛した命」

第二次世界大戦時に多くのユダヤ人を救出した動物園長ヤン・ジャビンスキと、その妻アントニーナの実話を映画化。

戦時下の動物園を描いた作品は、多くない。戦争になると、動物園の動物たちは殺される。戦争を始める者は、全てにおいて無責任極まりない。罪のない動物たちではなく、奴らが死ぬべきだと思った。

ジャビンスキ夫妻が成し遂げたことは、正に栄誉だと思う。特にゲットーに通い、ユダヤ人を移送・救出し続けたヤンさんは英雄だ。夫妻の息子さんが、ロバのように働かされるユダヤ人を見て疑問を持つシーンがあったが、それがまともな人間の感情だと思った。

ストーリーは部分的に不倫モノ風に脚色されてたが、原作本の内容もそうなのだろうか？ 女性監督＆脚本家だからそうってしまったのだろうか？ せっかくの感動実話が……。ヤンさんを主役に置いた方が良かったのでは。

ヘックがアントニーナにのぼせるってのは、ちょっと有り得ないような気がする。のぼせていて結果的に300人ものユダヤ人の逃走に気付かなかったとなると、彼はギロチン行きになってしまう。動物学者だが軍人ぽかったし、軽率なことはしないのでは。

ドラマチックにしようとして、不倫モノ風にしたのだろうか。しかしそれで感動度が下がってしまったのでは。多くの人は不倫をドラマチックとは考えないし。

失礼ながら「腕が立つ監督＆脚本家で製作されていたら、もっと素晴らしい作品になってたかも」と思ってしまった。

映画に少し登場していたコルチャック先生は、ユダヤ人孤児のために尽力し、自身もホロコーストの犠牲となった実在の小児科医。彼の物語を映画化した作品もあるみたいなので、観てみたいな。

ヤン役ヨハン・ヘルデンベルグの他の出演作も観てみたい。信念が伝わってくるような、熱い演技だった。

ウルシュラ役のシーラ・ハースと、（少し成長した方の）夫妻の息子役ヴァル・マロルクも有望そうな子役。

ヘックを演じていたのはダニエル・ブリュール。 私は「イングリシアス・バスターズ」を観て以来、彼のことが好きだった。（過去形？）
しかし近年は良い作品に出るのが少なくなってしまったように感じ、出演作をスルーすることも多くなった。 彼のピークは「コッホ先生と僕らの革命」だったのかな、と最近思うように。
今回の役柄は最悪だよ、二度と観たくない。（この作品というわけじゃなくて、ブリュールの登場シーンを） ダニー、いっそのことコルチャック先生でも演じてみたら？（笑）

私は動物・動物園が好き。 動物園のために何かしたいと思うケド、やはり行って・お金を落とすというのが1番なのかな。

高評価はできない作品だが、コルチャック先生やヨハン、子役たちを知ることができたし収穫はあったので、まあ良しとしようじゃないか！

「オール・アイズ・オン・ミー」

私は20年来の洋楽ファンで、ジャンル問わず聴いてきた。 ヒップホップは詳しくないが、トゥパックの名前は10代の頃から知っていた。 ラジオから流れる“California Love”が耳に残り、予告を見たら「観ない理由がない」と思い、12月29日の公開初日に遠出して観てきた。（上映劇場少な過ぎ！）

やはりヒップホップ界はきな臭いのか・・・と思ったが、それだけ黒人が過酷な中で生きているということなのかもしれない、とも思った。

ショーン“パフィ”コムズが悪く描かれるのかなと心配してたが、そういう感じではなかった。（私は彼の音楽が好き） 映画を観ると、トゥパックを殺害したのはギャングなのでは？と思うけど。

インタースコープから“Brenda’s Got A Baby”は聴きたくない内容の曲だから、アルバムから外したいなんて言われても説き伏せるシーンが印象的。社会問題をリリックにするような正義感のある方だったのだ、トゥパックは！

トゥパック役のディミートリアス・シップ・ジュニアは、かなりの熱演だった。

スヌープ・ドッグを演じたジャレット・エリス、声がそっくり！ スヌープも少し苦悩しているように描かれていて・・・何か複雑。

そしてノトーリアス・B.I.G.にも興味を持った。 彼の伝記映画も観てみたい。 演じたジャマール・ウーラードはビギー役は2回目のようで（似ているのかは分からないが）、安定感があった。

シュグ・ナイトの登場シーンで、怖い感じの音楽が流れるのが気になった。相当ヤバイ人っぽい。

エンドロールの曲のリリックも、何だか死を強く意識しているように聴こえ、切なくなる。 「俺には世界を変えることはできないが、俺のリリックに影響を受けた人間に世界を変えてほしいんだ」。 トゥパック本人の、この言葉が忘れられない。 トゥパックの本音は誰も知らないのかも。だが彼のリリックはいまだに人々を鼓舞し続けている。 偉大なアーティストだ。

彼の物語は正に悲劇。 悲しいが、とても価値のある映画だ。

Best Movie 2017

ということで、私が2017年に映画館で観た作品は30本。その中から、賞をあげていく。ちなみに私の2016年のBest Movieは、金賞が「トランボ ハリウッドに最も嫌われた男」、銀賞が「ヘイトフル・エイト」、銅賞が「ジャック・リーチャー：NEVER GO BACK」。とっても、私らしい。(笑) 　　というか年間のマイベストを見れば、そのライターの全てが分かるのカモ。この3作品については別の機会に書くとして、2017年のBest Movieへ行きましょう！

作品賞

金賞「わたしは、ダニエル・ブレイク」

銀賞「マグニフィセント・セブン」

銅賞「ボブという名の猫 幸せのハイタッチ」

毎年金賞には、“金賞にすべき作品”を選んでいる。熾烈な2位争いの末、最終的には物分かりのいいボブがセブンの兄さん（オジサン）たちに譲った感じ。(笑)

主演男優賞

ルーク・トレッドアウェー「ボブという名の猫 幸せのハイタッチ」

主演女優賞

ガル・ガドット「ワンダーウーマン」

助演男優賞

ビル・スカースシュゴード「IT / イット“それ”が見えたら、終わり。」

助演女優賞

ナオミ・ハリス「ムーンライト」

監督賞

ピーター・バーグ「バーニング・オーシャン」「パトリオット・デイ」

撮影賞

ホイテ・ヴァン・ホイテマ「ダンケルク」

脚本賞

ビル・ドゥビューク「ザ・コンサルタント」

脚色賞

エリック・ハイセラー「メッセージ」

作曲賞

ジェームズ・ホーナー&サイモン・フラングレン
「マグニフィセント・セブン」

視覚効果賞

「ドクター・ストレンジ」

アニマル演技賞

ボブ「ボブという名の猫 幸せのハイタッチ」

悪役賞

「ゲット・アウト」のアーミテージ家 （・・・笑）

子役賞

「ザ・コンサルタント」の子役たち

・・・こんな感じかな？ 30本が少ないとは、みじんも思わない。何とかランドも何とかマンも何とかウォーズもスルーしたけど、自分が観たいと思わないものは観ないし。

主演男優賞の他の候補者はデンゼル・ワシントン「マグニフィセント・セブン」、マシュー・マコナヒー「ニュートン・ナイト」、ヴィゴ・モーテンセン「はじまりへの旅」、マーク・ワールバーグ「パトリオット・デイ」、アンドルー・ガーフィールド「ハクソー・リッジ」、キアヌ・リーヴズ「ジョン・ウィック：チャプター 2」、ディミートリアス・シップ・ジュニア「オール・アイズ・オン・ミー」。迷いに迷って決められず「これじゃ 2020 年になってしまう」と焦り（笑）、予告編を見直すという作業をして最終的に決めた。主演女優賞も「アトミック・ブロンド」のシャーリーズ・セロンと迷った、迷った。

助演男優賞には「ライオン」のデーヴ・パテル、助演女優賞には「マグニフィセント・セブン」のヘーリー・ベネット「わたしは、ダニエル・ブレイク」のヘーリー・スクワイアーズ「ボブという名の猫 幸せのハイタッチ」のルタ・ゲドミンタスなどの候補者がいた。

俳優・監督・スタントマン・スタッフの皆さん、2017 年もお疲れ様でした。2018 年も映画を楽しみにしています。

最後に、作品賞に入れてあげられなかったけど良かった映画を書きたい。

「ショコラ 君がいて、僕がいる」

「ニュートン・ナイト 自由の旗をかかげた男」「ムーンライト」

「LION / ライオン 25 年目のただいま」「はじまりへの旅」

「メッセージ」「ゴールド / 金塊の行方」「パトリオット・デイ」

「ハクソー・リッジ」「ジョン・ウィック：チャプター 2」

「ファウンダー ハンバーガー帝国のヒミツ」「ワンダーウーマン」

「ダンケルク」「アトミック・ブロンド」「ゲット・アウト」「IT」

「オール・アイズ・オン・ミー」

あとがき

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

私は本を出すのは初めて。 改行のルールが分からず困ったし、読者が読みにくいかな・・・と思った。 これから校正を少し勉強する予定なので、次は今回より読みやすくなるはず。

2018年の映画のレビュー本は、2019年の1月か2月に出します。

皆さん今年も洋画を楽しんでください。

2018 / 2 / 24 Yukie Shibasaki

自己紹介

「洋楽と洋画が好き。」

好きな映画：トランスフォーマーシリーズ・トム・クルーズ作品

・クエンティン・タランティーノ作品、などなど

得意な映画ジャンル：R 指定モノ（バイオレンス系）

嫌いな映画ジャンル：ラブストーリー（・・・笑）

好きなミュージシャン：オール・アメリカン・リジェクツ、バックスト

リート・ボーイズ、ウーター・ヘメル、ミューズ、QUIETDRIVE、

NE-YO、ジャスティン・ティンバーレイク、などなど

好きなキャラクター：キティ・ほっぺちゃん・くろにゃん・ほっこりハリ

ネズミ・カピバラさん、などなど

好きな動物：猫・カピバラ・モルモット

その他：1年前位から天体に興味を持つ。月が好き。

理想の男性：Daniel Bruhl

ブログ：<https://yukienojou.blogspot.com>